

# 学校通信

令和8年4月30日  
西東京市立けやき小学校

## けやき小



教育目標

確かな一歩



e-mail [e-keyaki@nishitokyo.ed.jp](mailto:e-keyaki@nishitokyo.ed.jp)

### 「聴く」ことを継続して

校長 前田 元

日差しを暑いと感じるほど季節は駆け足ですぐにいきます。学校も新学期から早くも一月がたち、令和8年度も本格的に動き出したところです。各学年の教室でも少しずつ学習スタイルが作られ、青空学級でも和やかな雰囲気の中、学習に取り組んでいます。

五十嵐前校長も聴くことを大切にされてました。私もそう思います。一生懸命聴くことで、たくさんのごとがよくわかります。今年もけやき小学校では、それぞれの教室で聴くことを大切にしたい指導が展開されています。

英語でも「hear」「listen」のように、聴く行為についていくつかの表現があります。日本語でも同様に「きく」には「聞く」「聴く」「訊く」などの言葉があります。日本語の「聴く」には、「聞く」よりも、もっと注意を向けて聴くような意味合いがあります。学習の場面では「聞き流す」ではこまります。やはり「聴く」です。ですから、ここでは「聴く」について取り上げていきます。

「聴く」という行動は、どうやって起きるのでしょうか？話を聴く側である人が大切であることは言うまでもありません。学習の中では、教員と子どもたち、それぞれが聴く側になる場面が現れてきます。それぞれが、しっかり「聴く」姿勢で臨むことが大切です。それはもちろんなのですが、果たして、それだけなのでしょうか？

4月8日、今年度最初の全校朝会がありました。そのときの子どもたちの聴く姿がとても真剣なまなざしで、最後までしっかりと話を聴いていました。私はうれしくなって、思わず「聴いてくれてありがとう」と言っていました。

このことからわかるのは、「聴く」という積極的な姿勢は、話し手と一緒に生まれてくるものだという事です。一生懸命話す相手の言葉を一生懸命受け止めるということが「聴く」という姿勢につながると思うのです。そこには、話に対する思いだけではなく、話す相手や聴く相手を大事に思う気持ちが共にあります。そんな空間で生活することができれば、落ち着いた雰囲気の中で話し合い、聴き合うことができるようになっていきます。ただ落ち着いているわけではありません。そこには、「相手に話を届けたい」「相手の思いを知りたい」という強い気持ちがあります。落ち着いているのにもかかわらず、熱気のようなものが感じられる教室になっていくのです。

子どもたちが、ただ自分の言葉を自由に発する教室はにぎやかですが、それだけだと相手に対する思いがないので、「聴き合う」までには至りません。話し手、聴き手の双方が、それぞれ相手を大切にしながら初めて「聴き合う」ことができるようになると思うのです。

「聴き合う」ことを子どもたちに求めるには、お手本が必要になります。私たちがよい「聴き手」とならなければなりません。それは、私たちが話し手である子どもたちを大切にすることから始まります。そして、いつでも「話を聞いてもらえる」という安心感や信頼につながっていきます。そのためにも、私たち教師や大人が子どもたちにとって「最高の聴き手」になる努力をしていきたいと思えます。